

表4 各種毒性試験におけるダイオキシン類の体内負荷量

影響	動物試験による体内負荷量	評価
①薬物代謝酵素誘導	0.86 ng/kg (ラット) 20 ng/kg (マウス)	投与に対する生体の適応反応とみなされる。
②リンパ球の構成変化	9 ng/kg (マーモセット) 10 ng/kg (マーモセット)	高用量において、低用量での影響とは逆の構成比変化。
③クロルアクネ (塩素痤瘡)	4.0 ng/kg (ウサギ)	局所的な暴露の影響であり、体内負荷量の算定は不適當。 また、ヒトの知見を優先採用。
④免疫毒性	86 ng/kg (ラット) 100 ng/kg (マウス)	毒性影響と認められる。免疫系は複雑であり、今後、複数の指標を用いた詳細な検討が必要。
⑤雄性生殖系への影響	兎動物の精巣内精子細胞数等の減少が、27 ng/kg以上、55 ng/kg以上、86 ng/kg以上で観察されたとする報告あり。 しかし、688 ng/kgでも観察できなかったとの報告もある。射精精子数の減少は425 ng/kgで観察された。 受胎率低下は860 ng/kgでも有意差認められず。(以上ラット)	雄性生殖系への影響については、影響の発現と体内負荷量のレベルの関係が評価指標、試験項目、実施機関により相違するので、影響を発現させる最低の体内負荷量は、特定の数値を採用するよりも、複数の実験結果の総合評価により決められるべき。
⑥子宮内膜症	40 ng/kg (アカゲザル)	試験の信頼性が不十分。
⑦学習行動テスト成績低下	29~38 ng/kg (アカゲザル)	訓練で回復可能な軽度なもの。 行動学的検査のみの評価。
⑧雌性生殖器形態異常	86 ng/kg (ラット)	毒性影響であり、用量依存性、試験の信頼性等あり。

表5 調理加工によるダイオキシン類濃度の減少 シン類濃度の推移

		残存率 (%)			残存率 (%)
サバ	焼く	69.4 ± 6.9	牛肉	焼く	64.7 ± 9.8
	煮る	85.6 ± 1.6		煮る	61.0 ± 7.0
	つみれ	79.1 ± 4.8		ハンバーグ	62.1 ± 5.1